

脳性まひ児の水泳指導に関する研究

村田 萌 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 金田 安正

キーワード：脳性まひ，水泳，指導困難

1. はじめに

本学でおこなわれている水泳教室において脳性まひ児Mの担当となった。当初，Mは自分勝手な行動をするなど指導困難な状態だったが，1年間半後，筆者の指示に従い水泳の練習がおこなえるようになった。そこで本研究ではMの1年間半の変化から，その理由を検討することを目的とした。

水泳教室ではあまり積極的に泳がないMが遠泳大会に参加し1km泳ぐことができた。そこで，本研究ではさらに，水泳教室と遠泳大会の相違点をあげ，今後の水泳教室にできることを検討し，提案することを目的とする。

2. 研究方法

対象児は小学5年生，脳性まひ児の女子Mである。2011年4月14日～2012年7月5日と遠泳大会の2012年9月4日の記録から症例研究をおこなった。

3. 結果と考察

1) 集中すること

MはMの近くに筆者以外の学生や子どもが見える位置にいと泳ぐのをやめ，その場に立ったり筆者にひっついてきたりと泳ぐ練習ができなかった。また，学生Aを見つけるとその場に立ち遊び始めることも多く，水泳指導ができなかった。そこで，他の学生や子どもから離し，学生Aと違うコースに入った。その結果，Mは泳ぐことに集中し水泳指導ができた。Mはまわりに他の学生と子どもや学生Aがいるといったざわついた環境，すなわちマイナスの刺激が多すぎて練習ができない。Mを学生Aや子どもから離すことで練習に集中して取り組

むのではないかと考えた。また，遊んでいる人の中で泳ぐと，遊んでいいのか泳いでいいのかと迷いが生まれていた。学生Aと子どもたちから離すことで迷いが消え，安心して練習に取り組めるのではないかと考えられた。

2) 理解すること

指導した当初，Mは筆者の説明を聞きいれず，指示に従わなかった。指示に従わないときのMと筆者の視線は合っていなかった。Mの名前を呼びかけても反応がなく，どのように接すればよいかわからなかった。そこでまずMと視線を合わせた。Mの関心が筆者にないと考えたので，視線を合わせることでMの興味・関心がこちらに向くと考えられた。しかし，視線を合わせるだけでは筆者の指示に従わないときがあった。そこで，Mとスキンシップをはかった。すると筆者の指示に従った。Mの体に触れることで，Mの関心を他のことからこちらに引きつけ，筆者への関心から逃れられないようになるのではないかと考えられた。

4. まとめ

Mを他の学生や子どもから離すことで泳ぐことに集中させた。だから，Mが集中して練習に取り組むためには，環境が整えられていることが重要である。

今後のMの水泳指導では，泳ぐ人遊ぶ人でコースを分けることや，道具を整備し水泳教室内の秩序が保たれるような環境が配慮されることが期待される。

5. 参考文献

廣岡正昭(2002)集中力のない子

児童心理2月号 金子書房 他